

翻刻「姫路藩御船歌」(二)

飯島一彦

一 下里静氏のノート「姫路藩御船手組記録」について

兵庫県姫路市飾磨の郷土史家であり、姫路藩御船手組の家系に名を連ねた下里静氏(平成一三年没)が、後半生を掛けて博搜した文書・史料によってまとめられた著書「姫路藩御船手組」については前稿(「翻刻「姫路藩御船歌」(一)」)「伝統研究」第十号)で紹介した。

江戸期の歌謡の一ジャンルを占める御船歌については、その成立・変容・伝搬など、分からないことが多い。また、歌詞だけが多数書き残されて我々の目前にある。御船歌の担い手としては明白である幕府御船手組を始めとする各藩の御船手組についても、その伝承の実態などについては史料も僅少で、よく分からなかった。

しかし下里静氏によって、少なくとも姫路藩御船手組については、その歴史や役割・生活の実情などがかなり明確になったと言えよう。氏は、右の著書(初版昭和五七年、改訂増補版同五九年)を上梓して後も姫路藩

御船手組に関わる史料の搜索と整理を続けられていた。このうち、氏の遺品の中には『姫路藩御船手組記録』と題された手書きノートが数冊残されていた（下里節子氏蔵）。端正な筆跡で丁寧なペン書きで浄書された上に、さらに推敲を重ねている様子が窺えるノートには、氏の人柄と御船手組の歴史解明への並々ならぬ意欲が反映している。

さてその数冊のノートの中には『姫路藩御船手組記録18 御船歌集（一）』（内扉に「昭和五十八年八月 写之」とあり）『姫路藩御船手組記録19 御船歌集（二）』（内扉に「昭和五十八年九月 写之」とあり）と題された二冊があり、そこには前稿で翻刻した下里洋史氏蔵「姫路藩御船手御歌本 全」の一部、及び同じく飾磨在の御船手組の子孫であった川中清氏旧蔵の川中本八冊の内の四冊についての翻字が収められていた。

前稿の「姫路藩御船歌本収載曲目一覧表」で示した通り、下里静氏の翻字は書物の中に残された姫路藩御船歌（昭和初期頃までは伝承が残り、歌える古老が居たという）の全貌を示そうとしたもので、川中本が行方不明である現在では貴重な記録と言わざるを得ない。ここに「下里静氏の残した二冊のノートに翻字された姫路藩御船歌を活字にして呈するのはそのためである。氏の長年の苦によって我々が得られたものは大きい。」

一例を挙げれば、『姫路藩御船手組』の中にも紹介されている（幕末（安政二年一八五五）に姫路藩御船手組から幕府御船手組に御船歌を習いに行ったことが、伝状の存在から明らかになっているのだが、その際習ったとおぼしき曲目四種がそのまま一冊（G本）となっていて、されていることである。幕府から地方の藩への直接の伝授というものが有り得たことを、この文書は示している。これが紹介されるまでは、「幕府系御船歌」などという述語を用いながらも、実際に幕府から地方の藩へどのように御船歌が伝搬したかなどは、まったく推測の域を出なかったのである。この本によって、そのような伝播の仕方があったことが明白になったのである。

繰り返しになるが、下里氏は、下里本・川中本併せて八冊の御船歌本と接した後、姫路藩御船歌の全貌を示そうとしたようである。従ってE本などには一七曲収録されながら、氏のノートにはそれまでのA・D本に無かった歌のみを翻字してある。その点については前稿の「姫路藩御船歌本収載曲目一覧表」を参照されたい。

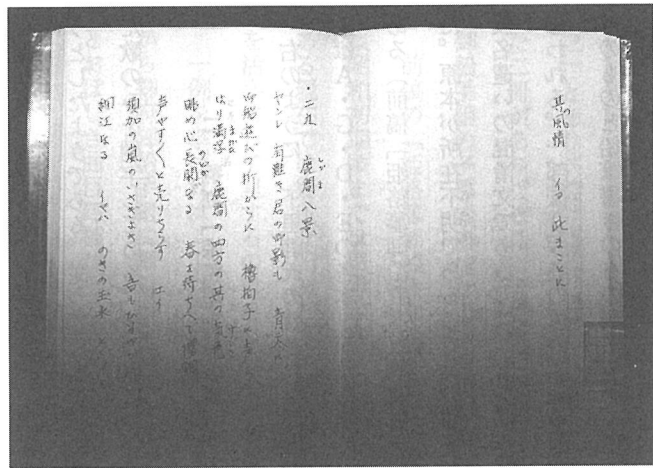
二 翻刻「姫路藩御船歌集」

右のように、下里静氏の残された二冊のノート（写真参照）から川中本八冊の内の四冊（氏の整理によって言えばA・G・D・Eの各本―前稿参照）の翻字を、氏の記したままに左に「」の中に示す。目次などは省いてある（前稿「姫路藩御船歌本収載曲目一覧表」を参照のこと）が、川中本に関わる氏の記述で重要なものは残した。原本が所在不明であるので氏の翻字と比較できない。なにに何とも言えないが、本文が仮名漢字交じりかつ新旧仮名遣いの混淆文であるのは、もっぱら歌の発声に従った平仮名表記中心の原本の用字をそのままにしたためと思われる。一部振り仮名の付いている箇所は、読みやすいうように氏が漢字をあてたものか。振り仮名にはペン書きのものと同筆書きのものがあるが、ここでは区別しなかった。その他、氏によって本文の表記が何度も訂正されている部分もあるが、できるだけ忠実に翻字することとつとめた。また氏の慣用の異体・略体字は通行の字体に直した。

なお、これらはもっぱら氏の業績であり、筆者はそれと広く紹介する役割しか負っていないことをここに銘記しておきたい。なお、【】の中には本稿筆者の注記であり、川中本の詳細は是非前稿を参照していただきたい。

(頁数の関係から、本号にはA本四五曲の分を掲載した。G本以下は次号に掲載の予定である。)

『姫路藩御船手組記録18 御船歌集(一)』より、A本二九「鹿_鹿八景」の冒頭



『姫路藩御船手組記録19 御船歌集(二)』表紙

A本【弘化五年一八四八書写、無題四五歌収録本】

一 皇帝

「 ヤアラ目出度いの天の岩戸の明け暮に 月も所になにしを 陰を写して三俣の 波も静かに 船さして 乗り行く末は駒形や 誰を待つちの山つゞき 見れば心も隅田川 流れに浮かぶ一葉の 船の昔はもろこしの貨狄_{てき}と言いし兵は 文武二道の達者也。 或時庭に立出でて 池の面を眺むれば エイヤヨ エイヤア このせいくと吹く秋風に 柳の一片散り浮かぶ 波に漂うその上に いづくともなく さ、がにの雲の上より落ち来り いとはかなくも打ち乗つて 汀_{みぎは}に寄りし有様を げにも思ひ初めしより 船を工みて造りたり 帝に是を奉る さてこそ船のせんの字を 公にすゝむと書くとかや

二 白雪

皇帝これにめされつ、 四海を安く漕渡り 御代を治め給うこと 一万八千歳とかや かゝる例を思ひ 今に絶せぬ船遊び 八百萬代は限りなし ヤラク、 エイ また白雪の降る年に 春を知らする鶯の軒なく 梅の枝の 花の匂いは 去年よりも エイ 眺めにまさる青柳の 糸繰返し 惜しむとすれど 春もはや エイ 半の頃に山櫻咲初めし ほれ いざきようを春の山辺にませりなん 暮なばなき花の 陰かはと過ぎ昔を思ひにて 立ち去り難き 木の本に エイヤヨ エイヤア この日数々々よの ほんほのん ほんくほ、ん イヤ へんぬれば 山吹の ソレ 花の花の 世の ほんほんの ほんほ、ん イヤ 盛に行人はなをすぎかねて 永き日を今日を暮して ふじなみの たつや弥生の曙に 唯一声の郭公 行へを見れば

有明の月の光りに卯の花色を争う心地して 見るにも
あかぬ我が宿の 葵つゝじのいろくくに 花たち花の
香を嗅げば 昔契りし君様の エイ 袖の匂いかと思
う心は深見草 忘れもやらで 夏もはやそなた。

三 竜田川

われは田舎の者なるぞ 都の君もつれなくて 浮名を
流す竜田川 から紅の紅葉葉に 袖に涙はくらべごとし
振分け髪の数々に 思い乱れて我が如く 雲井に燃
えて 飛ぶ螢 昔の和歌にも音もせで 思いに燃ゆる
螢こそ エイ 鳴く虫よりも 哀れとは ヤヨ エイ
ヤ あゝ情の深き言の葉を しらで過ぎ行く 君様の
報いの程の行末は 千度百度 かきやりし 其の水莖
の甲斐もなく 此振のよいさまに ヤレ 情の無いわ
の さん行月にかゝれ 村雲 イヤ そじや ないぞ
よ 連もなく この君にこそ頼みあれ 青柳よりも松

の雪折 エイヤヨエイ いつか いつかと思いねの夢
に

四 宇治川

昔範頼・義経は 木曾の狼藉静めんと 軍兵数多引具
して 出て立ち給ふぞ 床しけれ 頃は睦月の事なる
昔 比良の高根や志賀の山 昔ながらの雪も消え 谷
くふ氷打解けて 水は折節増さりける 夜はほの
くと 明け行けど 川霧深く立籠めて 馬や鎧の毛
色 それとばかりも見えざるに 佐々木の四郎高綱や
梶原源太景季は 先陣後陣の争いで エイヤヨエイヤ
ア 此宇治川の さしもに早瀬と申せども らんぐい
大綱切払い 生月・磨墨名馬にて エイ 向いの岸に
打揚り この先陣の始めとし 東国方の大勢が 我も
くと攻めくれば 力及ばず小幡山 伏見を指して落
行けば 治まる御代に成にける ヤラく

五 宝揃

ヤンレ あら玉の年の始めの御遊かな 御代を重ねて
宝船 追風に帆をあげまゝの忝けなくも君の御威勢
名も高砂の松もろ共 雛鶴の エイ 千代万歳と諷
う亀 だいくところ本俵 エイヤヨ エイヤア
此の民も豊に 田作りの末広がりの 数の子に 裏白
小袖 襟とすぐなる道の飾竹 さいわい菱に隠れ菱
隠れ笠着て 打出の小槌 打々かつて飲ぶ君を祝い奉
る

六 賀田

ヤンヤ 若衆よ深く契りしうき人に 立別れこそもの
うけれ ア、我をば誰か松浦船 こがれて乗りぞ
ものうけれ いとゞ我が身の ものうさに 西を遙か

に眺むれば 君に淡路の山見へて 猶も恋ます我が身
何時のなんどき人にこれ 松江の浜と打眺め 賀田
の浦にも着きしかば 前な潮で垢離をとり 三十三度
礼拝し イヤハ 願わくば君に一度粟島の エイ 大
明神と伏しや拝み ヤヨエイヤ あゝ今宵は爰に仮枕
寝ても寝られぬ今宵かな ヤレヤ 若衆是を聞くか
らは 人と契らば薄く契りて末を遂げ 紅葉葉を見よ
薄いが散るか 濃いぞ先づ 散るになりようや

七 太平

ヤラ 目出度の君の齢は 三千歳に泰平楽と治まり
て 御末繁昌の御代なれば 木草も靡く飛ぶ鳥も 君
に従い奉る 諸国国々大名の此有様を聞こしめし 羨
まざるはなかりける 門外駒の立てどもなきように
四方のかどめの玉の戸も 光輝く金銀の御金色をなす
とかや げにや只 喜見城の楽しみも 御代にはいか

で増るべき エイヤヨ エイヤア この松の葉は年
をふるほど色まさる 葉色と共に深緑 巖方に居る亀
も 千代万代は限りなし いわひ君の 例しかの此ま
つ ハヤ

八 時外

ヤンレ 時ぞとて咲も残らん 塵も又 初めて庭の糸
櫻見に来る人は酒宴の初め舞や諷やえてんらく コノ
柏木のえもんなまりを とんとけて エイヤヨエイヤ
此驚いて コノにげたくよ 簾の此うちの唐猫と
諷えは是なる庭の梅 イヤハ 一の小枝によいそれば
さつさそつこでく よいこのくくく うそがや
とまりて琴ひくひきで ノホ、エイヤンレ花が散る
おいて

九 都渡り

都辺りの里々や 伏見・深草・鳥羽・八幡・竹田のお
里いなの小笹の茂り合 分け行く袖の数々や 祇園
林の村鳥 浮かれ心ともる共に 清水・八坂打過ぎて
加茂川とゆる白波のかゝる眺めはあらじ 芳野・竜
田の花紅葉散るを思えば惜しまる、矢瀬や小原の賤
しきものは沈や麝香は持たね共 匂ひて来るはたきも
のよ イヤハ 四条五条を打過ぎて いつしかさまに
逢坂の関の岩かど踏ならし 山立ちいづるきりはらい
駒に任せて行く程に 大津打出の浜より 山田矢橋
の船に乗る 此堅田浦辺の ソリヤ 妻には嫌よ 月
に二十日は沖に住む イヤ しほつくかへずの ソリ
ヤ 朝通い つまがぬれそろ磯打波にかゝる小唄に程
もなく石山寺を伏拝み眺めにあかぬ志賀の松 ヤラ
く

一〇 古筆

天下泰平国土安穩 国も長閑に治まりて 殊にかいた
い静かにて 民も豊かの御代なれば 花のお江戸の名
所旧跡残りなく やかたくの見事さは筆に書くとも
尽もせじ 中にとり分け幾千代頼み奉る 君の御門に
立ち入りて 玄関広間を眺め 磨き立てたるもの、ぐ
は 玉も輝く如くなり 廊下よりして書院のかゝりを
眺むればなげし一だん床の 扱も掛字の見事さは 円
悟き堂の墨蹟に 大恵無進なんぞ なんどの手跡かと
誰に東坡が竹とかや 扱も見事なうすばたに さし
たる花を見てあれば 齢久しき松と竹 しんずいさ
してそひようけ うちゆうさたんの心持ち 年ふりま
さる古木の手たけく見へけるほらにてや エイヤヨ
エイヤア 此水際迄もこまやかに さても手際をさ、
れたり さて又四方の障子には 天笠したん残りなく

一一 新古筆

こまもろこしを書かれたり 南面に立ちた屏風を
見て有れば 光る源氏にみ、へしは そもく 桐壺の
夕べの煙 すみやかに晴れて心の須磨・明石 花散る
里のは、きぐも 残るも花のえんかどよ 其榊葉の紅
葉のが エイ 葉の上のみよづくし 六十四疊のな
がれ迄 金銀 こんじゅえんじゅせいたいろくしゆう
の筆にて書かれたり ヤラク、
又もござるよ東面の古筆屏風の見事さは 色紙の絵
に垣根こずとふ鶯の野辺に媚く忍び音や 先咲梅を書
かれたり はるの定家の手跡なり 今宵一夜は花の木
陰に宿を借りうや りんえやかかげいきよすけ これつ
ぐこのの 咲く蓮華 お手まさしくも見事なり
花のもとずな牡丹花にはなによそへて和歌を詠歌の御
手も有り 佐里や行成・為世・為家・為介・為氏殿の

お手迄も 誰に道風の震う筆こそ見事也

行く闇路とも小幡山エイ野路に日暮れて深草や月は伏
見の院殿や三条西殿じゆらくけい おうあすかみや

新筆なれど近衛殿 遊ばす筆の見事さは心慰む和歌の

道 イヤ 秋も此竜田の紅葉ばや 時雨に色は尚もこ
きんや新こきん齡久しき千載の ごせんしけつぎ伊勢
物語 そうきせんじゆの其中に色紙短冊を揃えておさ
れける 路地に回りに眺むれば さても見事な泉水や

千花木草屑の前に 池はすわまに掘られる 中に
鯉・鮒・金魚 螢火の灯火に エイ 寝もせて宿をか
るも草 まこも浮草 見ても慰む菖蒲草 行きては帰

り 立ち戻り 心留るは袖櫛の松を眺めて 日を暮ら
す 蘇鉄木蓮岩つつじ 万木千草 北は黄に エイ南
は青し 東白 西紅に 染め分けの 山をひようし

つつかれける 黒白石のいざごじき見越しまへおき靡
くひかへに手掛石 殊にいろえのおきどころ 天地陰
陽の表迄 手際すぐれて見事也 さて又裾野に茂れ小

も音にたちて おるにきどの明暮れも お、哀れ誰か
夕顔の露の思いは身の安宅 セラく 世々の思ひ草

ひく手にあがる石亀も お、みもすそや川に とき
そめて うらみくずの 夕まぐれ めぐりたゝずの

羅生門 誰を松風村雨月の朝顔 日にそひてくねる思
ひは女郎花 只一とせは松の山 エイ 姿を見れば

白髭と オ、なれつとしは老松の 哀れむ露の玉
葛 かけてめぐるは車 いつも心は隅田川エイヤヨ

エイヤ 此なるかみが雲のたへまにおとされて エイ
だいのりのもんに夕立ぞする ヤヨヘヤ 面白雲のた
へまの月陰を ふたり閑に眺めつ、語る枕は邯鄲 梅

は小塩の山嵐し 吹けば花散る櫻川 波の船橋打渉り
ながき松垣も暮れければ 鐘もさやけき三井寺の庭
の芭蕉もやぶれ あたりさびしき野々宮の 森にひび
くは富士太鼓 あまの羽衣かさね雲に あがるは雲雀

山 山は音羽の峯ならば のぼれも高砂の松は

松山 ヤラク

一二 御浜出

さても目出度御浜出の 御ゆうかな 先ず高砂の松の
月 尾上の鐘の曙に 君万歳逢ふの松原 遥くとき
してきぬれば 日笠の浦よ さても鹿間の落雁に 藤

江の暮雪 加古の島山 夕日こぼる、 からの島に
玉藻苅る 雨間も見えぬ五月雨に エイヤヨエイヤ
此あまさがるひなの長路を漕来れば エイ 明石の戸

より山戸島 あれに見ゆるは 面白や 此君の御船や
ら ア、サハ 家島の沖に ノホ、サテ 千
鳥隠れに 帆が見ゆる エイ お船灘よし じゃ嬉し

一三 稻荷

稻荷にかくる弓八幡 ひかば心もくれは鳥 あやの鼓

一四 池田

エイ 池田の宿を 夜はほのぼのに立ち出でて 天竜
川の早瀬をも 心すこくも打渉り その古の西行は
又越ゆべきと思ひきは 命なりけり

さよの中山中々に エイ 忘れて過ぎし都ともがらと
思ひいつ、も 今日も又ひま行駒のあしわ山 行間も
あらぬ大井川 水嵩増されば藤枝や エイヤヨエイヤ

此花とみつ、も打過ぎて うつの山辺のうつ、に夢
にも人に会わぬなる月も 今宵は清見瀉 三保の浦わ
の白波に形見に袖を絞りつ、 末の松山かくやらん

我が身にたへぬ浮島が原より見れば 富士の山 ヤレ
裾野に雲を引きはへて まだ時ならぬ白雪の積もる
日数はふる程に 駿河の国を打過ぎて 今宵は三島に

宿りつ、音に聞こへし箱根 あがりくつて眺むれば
ほのかに見ゆる山の梯打眺め かりうの和歌は面

白や ア、あけばまたこゆべき山の峯なれや 空行
く月の末の白雲と眺め給ひし和歌人の心 今ぞ思ひや
る かんじ給へば東雲に 立寄りみれば箱根山 つゞ
らおりなる細道を たどりくつて小田原宿に 今宵
は仮寝して聞けば お江戸は ほど近や ヤラく

一五 七夕

しづやたんだ エイ しづが思いの空晴れて いつか
近江の鏡山 おもてむくべきようもなし こくらを照
す月も日も 柴の庵にうつろへば 衛士が焚火も こ
のたび哀れなるとよ あま小船 こがれ行く身ぞ 物
思ひあけなんと案じ暮せば よしや唯 夢の浮世の仇
なるに 忘れもせぬ我が恋は イヤハ 七夕の ち
んくぎひん ひ、ん ひ、で ほんほ、ん エイ
露の間も そんなくは、んは、んはで ほんほ、ん
エイ

り見やる卯の花の 盛りはいつか過ぎ果て、 ハヤ
夢の間に臯月半ばと なりぬれば 心も俱に誘われて
あまのお船に打乗りて 川口表に出でぬれば 所も
せまき月見船 数を知られぬ人なれや 謡小唄に浄瑠
璃を三味線・小鼓 打鳴らし エイヤヨエイヤ 此
顔にか、りし乱髪 世のうたいつに忘れやうか 面影
を酒もり半と見へぬれば 数ならぬ身をも恨みつ、
お船の中を 見てあれば 年の齢を申さば 二八計り
と打見へて 花のような若衆さま その誰人と尋ね
れば お名をばのさてえもすまい しゃんとさせられ
たまりやせぬ エイ 花のお顔をつくくと 目もは
なされず 眺むれば エイ あの子さまは エイ 伊
勢の浜育ち エイ 目もとのしほが ソリヤ こぼれ
かゝるよの 今宵の月の御利生にて 又も逢事有る
べきか 今の思ひ雲にかけ橋 霞に千鳥 空飛ぶ鳥を
手づかみにおよばぬ

朝も夜さも エイソリヤ おもた計り イヨノほん
ほ、エイ 月に一度も会いもせで 身は玉虫や螢火の
消え入る計り こがれ行くらん むねの鈴虫や
ま、今此浦に引綱も目ごとにもはや思ふらん 詠じ給
ひし和歌も有 イヤ しらせばや人を恨みの恋衣涙重
ねてひとりぬるよをと読ませ給ふぞ ことわりぞ 濃
も薄くも我が心 露稲妻や石の火の 燃え立つ計り思
ひ切りしか闇の夜に また月かへる風情なり エイ
秋は又 ヤハン 山たにうつうす かげひとり 夜な
らでは通い給ふなよ 人の情は夜に有る ひととおり
一村雨の雨宿の ひやくし内のきえん朝 白風が
古も浮木に宿をとらせ給ふなり げにや思へば 小
車のゆる方もなし 我が心そなた

一六 月見

又もござるよ我宿の垣根や春をべだつらん 夏季にけ

一七 初春

ヤラ目出度の初春の 雪緋絨の着せながらは 小櫻絨
と成りにける さて又夏は卯の花の垣根の水に洗い川
秋に成りての其の色は ハイヤ いつも軍に勝色の
エイ 紅葉まがふ錦川 冬は雪根の空晴れて エイ
兜の星の菊のざも 皆花やかにおどしげの 思ふ仇
を打ちにとる 我が名を高くあげまくの剣は箱に納め
置く 弓は袋をいださずし ふつき御代と成りにける
ヤラく

一八 御船おろし

ヤアラ 目出度の御船 新たに造り立て 金銀朱玉
もちりばめて 工み事なる御よそはひは 是や此竜頭
鷓舟の かくやらん 錦の艦綱らんの梶 花鳥風月の

御遊び けうに乗じて千秋万歳 千代に八千代を高砂
の イヤ 松の緑も春来れば 時はかきほの花の山
けりに乗じて棹をさす 君を祝い奉る

一九 明德

ヤンレ 明德のあきらかなりし此御代に 住める民と
て 豊かなる 君の恵みも 久方の 雲井にまがふ
海づらに 船漕ぎいたす さをのうた エイヤヨ エ
イヤ 高砂や此浦船に帆をあげて 月もるともに 出
潮の 波の淡路の島陰より 櫓の音骨 かりりころり
と 漕出して つりするところを つつた所が イ
ヤハ お目出度いよの 歌ふに 歌も 面白や ヤラ

二〇 ときなり

さても時なり この君の御威光目出度うまし／＼と
天長地久 御寿に 民も潤い国も穏やかに 時はか
き様の 御ふぜい松にたぐえて色深き 君の千歳をべ
んことは エイヤヨ／＼ 此天津乙女の 羽衣で な
づとも尽きぬ 御かうんは なんぼ目出度や／＼ご
ぢいけや 所もふりき繁昌し 豊かな御代ぞ 久しけ
れ ヤラ／＼

二一 徳若

とくわかには 御万歳とよきみ／＼ たれば しんもま
た めぐる月日や お車の ぐる／＼と水車 みなか
みきよき ことなれば イヤハ 流れに浮かむ たみ
すくわん その名も今は 高砂の松に 小松の深緑

万代までも 住吉の 双葉の松も 老いもせで これ
にたぐえて御繁昌 此みぎわの亀も千代鶴も 君万歳
とうたふたる かゝる目出度き折柄に 御酒宴などか
初まりて そこで与太郎 肴とあれば エイヤヨ／＼
此今宵てんまのはし／＼聞けば 酒は樽屋のななじ
みの さわちのめさよへさあんあゝと 人まですゝめ
われは しこてこ／＼ よふいほれ／＼とさあおか
しへ 御酒盛りもすぎゆけば 千秋楽と歌いける ヤ
ラ／＼

二二 花よせ

さんせき折咲出づる花の 其の数尋ぬるに 梅花と咲
けば 天神の惜しませ給ふ 梅は匂ひの年経りて 住
める其の身ぞ 豊かなる 牡丹・芍薬・百合の花
色こそ替れ 我劣らじ櫻乱れて 木瓜の花 花に心は
撫子の さて沈丁花は枯れても匂ひあり 人に離れて

菊の花 いつまん迄もお泊りあれよ さのみ急ぎ 給
ふなよ 花より外に心留め 慰む時は小唄にて イヤ
ハ 石竹の花は エイ 見る度事に ソリヤ 古跡恋
しや ノンホン エイ 千葉椿に岩つゝ、じ 水にこ
とをや かきつばたの汀に八ツ橋 何をくねるおみな
へし イヤ 誰も着し花色衣程もなく 人の心の替る
つらさよと 花に三種の和歌のやく 花はどれより
紅 溢し兼たる紫の 所々は村消えて 庭のうら萩
うら枯れて 我身人や知るらん 朝顔の エイ まだ
見ぬ時を 待ち兼ねて 花はしほれて夕顔の 空ゆき
登る藤の花 エイ 色こそ是は山吹の むねの蓮花に
木蓮華 手まりの花に のふぜんや エイ そふよの
花をよそへつゝ、 いづれ花は 水仙花 此花をや

二三 櫻そろへ

ヤンレ櫻咲く 遠山鳥のしだり尾の なが／＼し日も

あかぬ 色香を三芳野の エイヤヨエイヤ 此芳野の
山を雪かすみれば 雪ではあらで ラ、ヤア これの
花の吹雪よの かへさは忘る花のもと 酔をす、むる
盃の 度び重なれば浅黄なる 櫻の花も 辨櫻になれ
ば めもとは塩釜の 恨めしかりし初風も よぎては
ふかで 散りぬれば イヤ 青葉とみれば 心も留ま
るかな 散りにし花の 色残りぞとつらね給ひし言の
葉も けふ ことわりと 打眺め エイ 又来る春を
松が枝に ヤラク

二四 松ぞろへ

ヤラ目出度の鶴は千年 亀は万年 松は千歳の代々
を経て 葉色は同じ深緑 かゝる目出度松也
異国大國吾が朝に 松を目出度ふ祝ひなる 先づ正月
には門松 あなたこなたと祝ひける エイヤヨエイヤ
此君が代の久しかるべき例じには エイ 兼ねて

魚も恋路に八瀬の川 鬣を自慢か鯨らがぬめり せき
だの川 鯉だてを尽して しくちのしぞう鯉にちぬ
しやく鱒鮭で浮世狂ひを鯛 鳥賊 肴召せとてざる
ふりは ふるは鱒や あめの魚 エイ 村立ちては蛛
蛸の 海月の陰や隠すらん 海にも鯛のお笹原 そ
よと計りは 鰻と汁 イヤ 岸陰に住む のふこのも
しやな柳ばいたの 髪をくづるかしく鮑 茶釜やつ
こりやさど諷ふたる イヤ 油たらく／＼とると イヤ
ハ かねつけてくんしや ぶり／＼して丹後鯛の 化
粧をすれば 艶もよく膝ござんのかみ魚 色白魚も
鯨も 親に底しんそこにべの 鯨 共のよふひくは
鱒 辛鮭 生鮭の 鱒にも鯛や鮎の鮠 まだ生な
れやうじまるのすしのうへなる石鱧も 釣の糸より
掛小鯛 エイヤヨ エイヤ
此おもくとも 引上げと エイヤク
さら／＼ 引きなづし エイ
月の出潮も入潮も させど引けども まながつほ い

ぞ植えし 住吉の松 ヤヨエイヤ おもしろ松の名木
多けれど 尚も其の名は 高砂の松の緑も 君が代栄
え さかふる 目出度さは 攝津・播磨の堺の松と
和田の笠松 高野山では三姑の松と 志賀唐崎の一つ
松 今に絶えせぬ名木よ 音に聞こえし 越前の 塩
越松とは是とかや 加賀の国では安宅の松と 彦々
尋ね 爰に駿河の ヤア 三保の松原 清見寺 殊に
北野の老松と エイ直なる御代に住吉の 松は常盤の
いろぞかし

千代の年経る春毎に 尚色まざる姫小松 ヤラク

二五 魚ぞろへ

ヤンレ 魚の色を凡そ集めて 和歌にして 節も折々
煎酒の エイ 中にも梅の花鱈 エイヤヨエイヤ コ
ノみてもよや味も 吉野の櫻鯛 ほらてら風にも 吹
かれてや 鱗ちらする紅葉鮎 水の緑も魚ごのみ

そかわしげに 今は 波の上よりも 飛魚の鱗をのし
エイ
鯛 鮎 鯨 鯉 鮎ほこの荒恐ろしの 鯛の 四ごまめ
鯛をえごのみに好む鯨や 油魚 あんこばけらに
島回り尾鰭をふるは 雪魚の しいら せんじん 茶
袋の ばぐらも 雑魚のいろ／＼も 金魚・銀魚の
たわら子も 車鰻すの たからか お料理人 いつも
お目出度の コノ浜の松枝も 鯖よる鯛の細魚えん
鱈 はん 鱧 おゝ 小歌でしげる

二六 遊女ぞろへ

されば神代の其の昔 みとのまくばい初めしより 妹
背のはしの中絶えず 室のとぼその 明け暮れに 水
上清き事なれば イヤ 流れをたて、 エイ 尾の町
に エイヤヨへ 栄え／＼て住の江様の 松の葉色は
ときは様 八千歳様のかね事に いつも姿は若狭様

錦をかざるきぬえ様 イヤハ 見たかく おてき
たち みたぞくがってんじやいの ホノく トン
ホン ホン ホノ、ホンく ホイヤ 朝霧様の御
出でじやいの 島隠れ行く船人も 恋風さまに吹戻さ
れ 心は有頂天迄この登り 知らずに下り給うは 坂
田様の御事 イヤ しんてきよ とんてきよ なんぞ
我もおもひ候。 浮氣の沙汰も金がする 一つはかい
てぞほしき金太夫様の御事 イヤ
今度ござらば ヨイく 持つて来てたもれ 伊豆の
御山の ヨイく なぎの葉をへ イヤ 初花様の御
出でじやいの 船路遙かに眺むれば 岡山様 こわい
ろを 三味のしらべに弾乗せて ツンテンチリテン
ツテ、ツと 琴の音を轟る松風か 峯野様の御事 イ
ヤ たそがれ時に門に立つ 人はいかさま我を イヤ
待つか忍ぶかの イヤハ ひんの白波恋の和歌新古
吟につらねし 三閨様の御事 イヤ
格子くを眺むれば しゆれん ぐれんにまきあけて

の心辛崎様 よし崎様の御事 イヤ おいにくらしな
我が黒髪は 白川の 三つ輪組むまで 若山様の 契
りじやい エイ 所繁昌の例しなり ヤラク

二七 島回り

ヤンレ一葉の船を浮める海面に 波静かに栄ふ鹿間の
浦の景 沖に数ある島の名や 始めて見へし 上島や

エイ

武士の荘り置きける 鞍掛島 並びし太島 宇和島や
淡賀を打ち眺め イヤハ 鹿島 矢の島 おごの島
行船の潮は そめねど 黒島や 坊勢に続く 西の
島 やげやこがらを打ち過ぎて 雲を戴く高島の 色
も常盤の松島や 駒も数ある足並みに 人の齢も 長
島と 三つの頭に 大つぶやちや 小つぶら 荷ふ襲
島 是や祝ひの 小松島 エイヤヨエイヤ 此浦ふれ
て 淡路の 瀬戸に鳴く鹿は 家島が崎に妻が併もれ

ゆらりくと 静山様の御出でじや コノ 恋し床
しの君さまや さてく ヨイく 先度は御状下さ
れたれ共 ついに返事の便りもなく さてく 無沙汰
に思ひまいらせ候べく候 どっこい そっこい あす
は会ふと書いたる文の筆を 染之丞様の御事 イヤ
色には出でし我恋は 物や思ふと 問わさんす 顔に
紅葉の散り掛る イヤ 竜田様の なり振りや 互い
に陰を水鏡 おもはゆげなる顔ばせは 井筒様の御事
イヤ
室といよ 此家島と 紫島と すじ向かひ 橋をいよ
此かきよ其やれ 船橋を イヤ越川様の御通り
じやいの みやはとがめぞ おちこも人も ぬれて
ぬれかゝる 信濃様の御事 イヤハ
夢と契りし手枕に 眺方の鐘の音や あかぬ別れは
尾上様の おもわく イヤハ 命かけてもよい それ
は此君そつこで請け出せ 三百両 コノ金山様の御事
イヤ 比翼れんりの語らひも そつちこつち 互い

るとつらねたまひし 和歌人の心 院下に黒ふごや
春を知らする高山の 霞も堅く 見ゆるかな 小島し
づも から荷 女床しき君島や かんざしよする桂島
誰が大いに投石の 池には四島を粧ひて か程名に
ある島々をめぐりめぐれば ものも さても 飾万は
ほど近や 御船灘よしじや ヤラク

二八 御城回り

我々田舎の者なるぞ お江戸見物申さんと 初めて爰
に旅を品川打ち過ぎて 爰は程なくしば口よ まだ新
しき新橋 とろくと 打渡り 愛宕参詣仕り あ
ら面白の町の名や 今来て爰に 名所旧跡みのなるに
花に櫻田打ち過ぎて 見てハまんく 際もなし
人も豊かに住める町々は 目も驚るかす気色なり 末
頼母し 我も久しき 速やかに 御城見物申さんと
しばし行み眺め 心言葉に尽くされず 天竺震旦 吾

が朝それ 三国に並びなき 昔も有りし 唐土の威
陽宮もの、かずにて 数ならぬ 櫓々の 其の数は
玉も輝くばかりなり

下はまんく あをきいれたる 堀の魚 金魚・鯉・
鮎・菖蒲 かるもにも杜若 数のつばさが羽を休め
千鳥・白鷺・鶴亀・雛鶴・鴛鴦・鷗 池のまこもの
乱れあひ 心勇みて面白そらで 光の輝けば から
できん山にしびに 月と日の 光争ふごとく也

さても見事な御本丸 南に猛き愛宕山 西に山王 北
に明神 峨峨として 鬼門の守り給わんは 東に清き
誓願寺 あいにもへたは紅葉山 東照権現様のや 御
立なされ 祝いかしづき奉る けに有がたく上下往
来の人々は 是を拝まん方もなし イヤハ 君の代は
千代に 八千代に さゞれ石 久しかるべき御威勢
は 尚も月日が重なりて 回り回れば 御天守の 見
上げて見れば 八幡の 四社に定まる 白鳩がとやを
立出で飛んで 飛びやあがりて 御代は 万年 千

おとなしくされ共 下戸は 寒そふな ねぐさにな
つる 青々と エイ 上戸はしげる裏白や 花の都で
ちよつと見し 十七八の ひんしやんと エイヤヨ
エイヤア 此はゆる ぬんく塗笠 伊達で 優し
きやしやぶりで じついとしへ それがほんに 誠が
はゆる ぬんく塗笠 こちのかゝらに着せたらバ
鍋がつきへ 此勢ひを見てたもれ よふて うれして
なかのよい 中々島に 夜の間濡れて しつぽと
しなもので エイヤヨ エイヤア
此君が代は 千代に八千代に さゞれ石 巖となりて
万年の 亀山撞く鐘の音 エイ 地方につどふ 入
相の 数の船々 跡先に 君を仰ぎて 奉る
うちわの松の よそ迄も ヤラク

三〇 道中

ヤンレ 玉ぼこの 道の満たる 御代なれば 曇らぬ

代ふりて 舞うて遊びし 其の風情 イヨ 此まこと
に

二九 鹿間八景

ヤンレ 有難き君の御影も 青天に 御船遊びの折か
らに 櫓拍子に声をはり満海 鹿間の四方の其の気
色 眺め心長閑かなる 春を待ちへて櫻鯛 声やす
くと売りちらす エイ 須加の嵐のいさぎよき 音
もひそやかに 細江なる イヤハ のきの玉水 とく
くごされ 重くござれば 人が知る 有りし言葉を
思ひ出の 知るも知らぬも夕涼み 世の善し悪しは
思案橋 月にありく摘むほたて 津田に其俣落雁の
友呼び立つや 浜びさし 沖波遠き船長の 嵐帆
に入れ 乗る船を 家島の帰帆と 打ち眺め 波もう
つろの夕照に すなどるわざの 濡網を ほしもあへ
ぬや 鴻山に 降り積む雪の 白妙に 波すまづかへ
月の 都より 花のお江戸の 道すがら 夜通れども
昼行けど 自由自在に 目出度うて 名所を眺め
古跡を感じ 馬方に拍子をとられつ、 遊山ながらの
道とかや 泊りくや 馬つぎを 京を立ち出で
能き道連れに コノ逢坂の関の清水で 影みれば 馬
土や引くらん 乗掛けの 今は大津の 浦を過ぎ 草
津に宿を 借寝して 暁と 一夜は 石部の宿里は
小里で山寄せなれどよの 馬士の恋する水口を 駒に
打ち乗り 土山を越ゆる 鈴鹿の坂の下関の地蔵を伏
し拜み 世は万年の亀山や エイヤヨ エイヤ
此千代迄も イヤハ
爰に住居を庄野宿 誰が見てさへ 堅そうな お、
有難そうな 石薬師 しばし宿をば借り初めて 人の
情けにほだされて エイ 五日はた、ぬ四日市 天気
よければ船に乗る 桑名の渡しや コノ 着ぎにける
ヤラク

名所々は宮に着く 忝なくも 此神はべりは 熱田
 の明神なれば 信あれば 必らず富貴榮華に 鳴海瀉
 花も 池鯉鮒の宿を過ぎ 人に心は 岡崎の 宿に
 入りぬれば 馬方が イヤ とろりくと馬追いかけて
 エイ 花紫の藤川や 更け行く夜わも しらく
 と 赤坂過ぎて 御油の宿 イヤ 笠をかたむけ 田
 歌をあげて イヤ 早乙女の植えし 早苗の いつの
 間に 黒みてはらむ 吉田かな オ、名は二川と聞
 くなり 見へぬ 瀬瀬のあるじやなし 誰が教えて白
 須加や 今見る水に新居川 舞坂通れば 面白や
 ざ、んざ 浜松の宿をそぐれば 天竜川 渡しの船に
 打ち乗りて たんだ おせく おさませ イヤ
 押して 出船のへ え、とら

のお里かや 雲間も伊豆の月影 今宵三島の宿に着く
 御代は目出度ふいつ迄も 治まる箱根の 檜の木坂
 を 越ゆれば お江戸は ほど近や あさの小田原
 打ち過ぎて 山はうしろに 大磯の宿を過ぐれば 平
 塚や 藤沢・戸塚は急ぎける 道はいかほど 谷に着
 く 硯をならし 筆を染め まだ幼なき子供等がい
 ろはを書き流す 宿の名や 神奈川 河崎・品川 打
 ち過ぎて 御代は万年 末代の お江戸に早く 着き
 にける ヤラク

三三 喜久

世の中の常の習いも 時移り 人の心も しめやかに
 折しも秋の つれづれに 眺めにあかぬ 菊の花
 たへなる姿 やさらしく 咲き乱れたる有様は 春に
 も増さる 気色かな げに徳多き花のかげ 立寄り聞
 けば その昔 じどう と言いし上童 ぼくわう枕

御目恥かしや 人の品 爰は見附の宿とかや 風袋井
 を過ぎ行けば 此岸边に 波は掛川や 二つ坂のわら
 び餅 ヤハ 練る、らん 金谷の 宿に着く かわる
 瀬瀬に 大井川 誰がおいそめて島田と 名をばつけ
 つらん 松に花咲く藤枝や 日数つもりん 岡部の宿
 そこで狸の腹鼓 コノ拍子をとりにて 宇都のや
 エイ うつの山辺を過ぎ行かば からの 馬方くつの
 直も まりこの宿や たか、らん 旅を駿河の府中に
 着けば あたりに多き 名所かな コノ 江尻を過ぎ
 て 行くほどに おわずかさずに ねつ興津 住めば
 都か ゆういそれ 由井かん原を イヤ 富士のお山
 をや ソレ 富士のお山は うしろにござる エイ
 三保の松原 前に見て いつも遊山をする人は 世は
 吉原や原の宿 沼津と聞かば 古の あやめまこも

をこえし罪により てつけない山に 流されて 菊のし
 た、りめいとなる 文帝これを請け給ひ 花盃とな
 し給ふ 今重陽の宴となる か、る目出度き 菊の
 酒 流れくみて陶淵明 末の世迄も よも尽きじ 凡
 そ花に小菊あり 露をあざむく ぎよくばたん 君も
 御盃ときようたいはく きようすいよふと 葉重なり
 さて又 六儀とて むつつの品を撰みつ、 大輪小
 花の べだそなく しづ心に任せつ、 万咲く万花の
 心を寄せ しばしとてこそ 打ち眺む きはづくに
 葉は青柳に茂り あい花形正しく色つやも かさね
 は厚く あらまほし エイヤヨ エイヤ
 コノ天の原 ふり来てみれば 羽衣の 雲井を照らす
 月のかほ 大山まく白雪の そふせたかなる 山う
 ばの イヤ 雪をへ 雪をさそへて さい このさ
 ヤンレー やまじやきん それわへ 獅子伏す野辺の
 そうじようこう いづつに寄りしよれこふは なりひ
 ら通ひなれたる たかやすに イヤハ 風吹けば お

きつ ころんづ ぶらしやりと 風折えほし かんざ
しも エイ 打ち落とされて せんかた波の よるべ
なく ひさげの水は 湯となりて エイ 互いに思ひ
桐壺の きん孔雀 鳳凰 舞ひ遊び まつばよりきん
つるのこのひなの 住居も 春霞王照君の 御折草
くるりくと めぐり来て エイヤヨ エイヤコノ
都 イヨコノ 忘れの都 忘れの大般若 よれつ も
つれつ せつかわも 其の名異国に隠れなき 鷺のみ
やまに たへなりし エイ
みやの一字を ひらくなる れんげばくにや 深草の
かよひ小町の 百夜草 数々 色々のエイ 目出
度き御代の 祝い草 千秋楽の例しかや ヤラく

三四 鹿島

我はとふく田舎の順礼でござる 回りくくて 神の
社を尋ぬるに エイヤヨ エイヤ コノ千原振あら有

三五 伏見下り

ヤンレ 万歳と唄ふ拍子の 伏見より 竜頭鷓舟の御
船に召され 棹をさす日の 曇りなく 勇々しきおん
な取楫や 面握に 又巻き上ぐる藤の 堤の遥々と
淀の川瀬の よどみなく 波の花こそ はるは 又
まなくよすらめ眺めあかさんと 心浮津の明神の 鐘
こんくと狐川 男山に立ち給ふ イヤハ 八幡の
宮井と伏し拜み げにや まこと 此神は弓矢守りの
深ければ 運ぶ歩みの ひまもなく 橋本 山崎打
ち過ぎて 余所にみなすと言いながら 心とむる
関戸の院の 昔忘れはせじな 旅人の まくさかりこ
や 葛葉や しんぎ エイヤヨ エイヤ この鶴殿の
蘆の角 くも井 いせ人 旅人なれば お、きいそ島
きんや 枚方 天の川みちや 片野の草枕なる、も
心唐崎の エイ 浮世の塵の芥川 出口三島へ漕

難の 御事や 天照大神 熊野の権現 誠やらな
鹿島浦辺は ソリヤ みるくお船が着いたと イヤ
ハ 鱧触にはな伊勢と春日の ソリヤ 中は鹿島の御
社 イヤ 天竺はな近いなげてそよ ソリヤ た、ら
踏むか ア、イヤ 聞こへた イヤ た、らをばな
何とな 踏ぞよ ソリヤ た、らたんと アイアヤハ
八つなる イヤハ天竺のな雲の間から ソリヤ 十
三の小姫がよね巻く イヤ よね巻かば なたあも
なまけかな ソリヤ みろくつゞけとよねまく エイ
祇園しようじやに梅の宮 忝なくも 八幡の御立給
ふ 御社を 心静かに 尋ぬるに 惣じて神の御数
は 九万八千七社なり エイ 高天原に 神ぞまし
ますが 神の麓で 伊弉諾・伊弉册様の御事や 我ら
が故郷は 出雲の国に立ち給ふ 素戔嗚尊 されば神
の御為に 惣政所 今度歩みを 運ぶともがらは
誰か利生を請けざらん 此の御利生と請取りて 弓矢
を名をば 高砂の松はや

ぎ行けば こやのさんしうは 是とかや 船に帆巻
く柱本 楫乞う音の せんじようが 花や今切りうち
眺め 春の気色とさえずる エイ 鳥飼いなれば梅櫻
エイ 三本松は天神の 愛し給ひし 佐田の宮 き
ねがたもとに 織る紋の いとし美し ござん島 エ
イ 面白の花の盛りや 眺めも多き名所かな 一つ屋
江口を打ち過ぎて 三宝寺河原に 着くと の 見渡せ
ば 吹田の里とよ こなたに下島 べた村雨は 降ら
ねど 森口今市 さんばだいかいおんぼらじまたき
夏にはあらねども 我がいとなみを 賤の女の布を
晒の宿越えて 照や春日の 長柄のお里 宿をかす
がいの その あるじかや 源八が引く網島や 河崎
の空も 心も晴れ行けば 浪花のあたりの曙に 早や
大坂に 着きにける ヤラく

三六 船齋文

そもく被い清め奉る 御船玉の本地を 尋ぬるに
 皇帝の臣下に 貨荻と言いし人 ある時 庭上池の面
 を エイ 見渡せば 一葉に乗りたる 蜘蛛の振舞い
 工みて船を造りたり エイ さて吾が朝にても 紀州
 熊野の権現の エイヤヨ エイヤ コノ御山より 九
 本の大木取り出だし 伊勢の国 二見が浦にして 七
 十五間に 行馬を結び 七重にしめ張り その八重垣
 の内にして 船を造り給ふ御時 もろくの エイ
 神達集まりて 第一住吉大明神 船玉祝ひ納め給ふ
 エイヤヨ エイヤ コノ先づ海は 竜宮界の敷地なり
 船底は 八大竜王共名付け給ふなり 棚が三階 上
 棚が 正八幡大菩薩 中棚が 春日大明神とも名付け
 給ふなり 加鋪は 粟島の大明神 櫓権は毘沙門天
 表は ぐんだり夜叉明王 鱧はこんだりようぶ大日

三七 牡丹

さても面白の 眺め事なる花園に 色争ひし 品々の
 エイ わげや思ひ深見草 春は心も浮草に エイヤ
 ヨ エイヤ コノ濡る、袂あめが下 君を イヨ ま
 つかさの よいくに 月しる見へぬ 恋の道 いき
 の松原秋山を ひとり越ゆらん 竜田姫 イヤハ 紅
 葉踏みわけ鳴く鹿の声白菊 朝日こういろも血汐に
 染め川や 浮名を流す放生川 八幡 倉橋 打渡り
 けふを九重に 咲き出でて しばし 爰にやどり木

如來共名付け給ふなり 船玉の本地は 十一西觀世音
 筒と櫓は 天照大神宮 あまの逆鉾共名付け給ふ
 なり 蟬口車は うほうどうじ 桁打回しは 日本第

一大竜権現共 名付け給ふなり 帆は法華經の 八の
 巻 弓手の手繩は 金剛界 妻手の手繩は たいぞう
 界にも表されたり 帆足は千手觀音共名付け給ふな
 り 身繩苦緒は 文殊普賢 楫は 水神なり 床は
 愛宕大権現 苫は 天人の羽衣共名付け給ふなり 綱
 の三房男綱女綱とて こきうこのきづななり 又は役
 の行者の 貝の緒にも 表されたり 水押は 三ヶ月
 の御真躰 さがりは 白髭大明神 長柄の杓は 弁財
 天王共名付け給ふなり 車立は こうもくでん 戸立
 は 天の岩戸なり 横上は 高間が原 あまは 金剛
 童子共 名付け給ふなり 船印は 梵天帝釈 貫拔
 は 日天月天 錨は 三宝荒神 垢取は 正法天王
 共名付け給ふなり 垣立は 二十五の菩薩 幕は天の
 二十八宿地の 三十六ぎんなり 水棹が三本 一本

の 梢に蟬の羽衣を 掛けし思ひ 底深き コノ 遠
 山の井の水清く 立寄る陰の二た面 袖の内より
 ほのかにも 見へしは花の あか手拭 包む心はせん
 るかう その色深き 小町白 誰が逢坂の 関守も
 つまべにくわへし なりふりは 千秋楽や らくらく
 と 明し暮らせし 富貴草 くわきのゆるきん ちう
 ばく エイ 君のてくたへにてまり 我もとつくはね
 の 峯より落つる 滝本恋ぞつもりて エイ こくり
 よのいちうむらだつ ヤレ 其の中に 高根そびへし
 エイ ふしの雪 消えぬ思ひに なりぬるハき 花
 の姿も 玉牡丹 ありやくあたりも 光る源氏白
 いかなるも あんのかやよしも はくは 三國市原の
 イヤ えだを みこしの色も うつる心は 乱れ心
 に 千歳も深き 松の葉の イヤ 此濡か、りくるの
 イヤ 雪女 情の道にの イヤ 踏み迷いの さや
 まにたどる雲の袖 ちらと立ちぬる 桐壺の イヤ
 花散る里に みをつくしの 君まつ宵の つれづれに

ながれなすかに 水のやの 井筒の上に おくは
くの 哀れ音羽の夕暮れに こがる、色に いつもは
く エイヤヨ エイヤ コノしんから底から なびか
とて 今の日の出のこびなたや 照るこうかけて契
るらんと れいしまれなる 言の葉も イヤ なれ
つ、忍び行くほどに こうざんこびなたや 打ち過ぎ
て はや曙の朝雲に 北斗の星の陰さして 光り輝
くはつか草 咲き乱れたる 花守も 霞が関に 着き
給ふ ヤラ〜

三八 新牡丹

ヤンレ 万歳と歌ふ拍子の ふしくも とけては
君の御心 げに有難き御庭の 花を数えて 名取草
源氏の花の末迄も イヤ 其の名も 名高き花や 富
士の雪 三国白につくらん そよじろたへぬ 満月
の エイ日暮らし過ぎて いづもはく とふげつ隠す

おわりけに きんきよく イヤ さまはふとや ぶ
とい 男心は 玉牡丹 少し心は こびなたの とも
のにとくを かたろいて エイ いづつに 寄りし
つゝのめの なびかに しやんと 竜田姫 イヤ や
れ手を引くな ヤレ くらはしを よふたふりして
びらしやりこう おもわくぶりは ちしほべに てん
とうどぶり たきのくにこう 花の錦も咲き分けて
盛りも早く 安ひべに いざそうよふに ひと踊り
エイヤヨ エイヤ
このとろ〜な とろ〜な あぶら袖の 内から
松の葉の 北斗の星の あからみて 早や曙の朝霧に
立そふ音や 鶯の森 其の数々は 多けれど あら
〜爰に 鑑草 げに花園は しゆんしやうの 一
刻価い鳳仙花 心を分けてふかみ草 万歳楽と諷ひけ
る ヤラ〜

村雲紅 八重雲まじる くぜのさた イヤハ 更け
ゆく俵に やれこりやまがしよ 天の川羽衣の ぬぎ
て七夕の イヤ さぞや今宵は うれ〜しかる さ
しはござらぬ ヤレ雨はなし ひとせ積る 言の葉を
そろ〜 結ぶ乱れ髪 思ひを晴れて いなんすか
ハヤ 有明白に 朝香山 東雲わけて こうざん

ぬつと でざんす 朝白べに れいしの君の佛も げ
に色つやは くわげんこう 竜眼紅にも 勝れたり
イヤ じゃう花 見てから 余の花見ればへ 雨によ
ん〜 よごれてこの間から 咲く花は じつおか
しへ 去りし ごげんの ほど過ぎて 彼のげんその
弄び 楊貴妃様の お心も エイヤヨ エイヤ

コノなへき白にへ 浮草のよ エイ せんしやう白に
なりにける 千載はくに 添うて後 イヤ 名を
みやうかくじと 改めて あまがさきにも 山の井の
もあんにしばし よどあさひ それでも どうやら
美しは よごれに袖じやないかいの イヤ わかげも

三九 菊水

又もござるよ千秋の 万代恵む 菊の名を あら〜
飄ひかぞふれば 先万歳の鏡とは 疊らぬ御代に 植
へ初むる 千代の若松 若緑 エイヤヨ エイヤ コ
ノ君が恵みには 呉竹の そりや 世々を重ねて 友
白髪 都のふじの名も たかき喜見城かや 繁昌の軒
の橋かほりきて 昔を忍ぶ 袖笠の はつれ雪降る
ほうらいの 山は 動かぬ 豊かさを 翔並べて舞
鶴の 巖の亀に 寿は エイ 伝授車の限りなく
回る佐保姫・竜田姫 色を写して隠れ蓑 隠れ笠着て
御宝を 打出の槌の しんこくは エイヤヨ エイ
ヤ コノ尽きぬしるしは 神楽舞 其のみてくらの
絶へやらぬ 流れの末も 芳野川 水結ぶ手も花笠の
匂ふ心は すめきて エイ 月の都のみすのうち
錦の梅いつくしみ 四海波迄治まれば 玉の盃 とり

くくに 数へ尽させぬ 菊の香の そのしたゝりが
谷川に うつり流れて いまもなお 子童の齡ひ白菊
の イヤ 花の姿も ほんぼ、ど、んどつこひ イヨ
そのやれ そのまゝに ありはこりや どんどべ

七百歳を保つとや 尽きぬ例しは 水清く 流れの末
も 賑はひて 呑めば 甘露の かく迄と 狸々菊
の 舞ひ遊ぶ ことの葉草も 世も尽きじ つきせぬ
御代は 末代の ヤラ〜

四〇 春立つ

ヤンレ 春立つと 言ふばかりにや 姫路なる 山も
賑わいて 今朝は見やらん 松の葉枝 千代に八千代
を さゞれ石 エイヤヨ〜 コノ重ねかわらけな
なん〜なはん はよほ、いほい〜と 育てまつ
る 君臣くわ樂して 民も豊かに 住む月の めぐれ
ば心も いさぎよくして ぎん〜 うれし目出度

三千歳に イヤハ 一度花咲く ホンホ、ど、ん
どどつこひ イヨ その ヤレ その桃は ありは
こりや とんどへ しやうが盗みし 瑠璃壺 イヤ
ハ 匂ひも高き売薬 おひらくの老を助ける 竹の杖
よをふしこめて 行く年ぞ イヤハ 朽やせまじや

欄干に 馬も進まず膝栗毛 イヤハ しばし休ろひ
ヤレ こととへば 松に答へぬ 風ぞ吹く しやん
と 誰をかも知る人に せん高砂の イヤハ 松は昔
の みしりごし あなうれしうましや いつくし花宿
の 是ぞ言葉の花の縁 イヤ その花たもや 此度は

幣取り敢ぬ神参り 粟島の神と住吉と 女夫にて
妹背を守る 御誓ひや イヤ 有あけの つれなく見
へし 別れより おのが鳴音は 鶏頭花 イヤハ 君
か手馴れの 手鞠の花がは 一二三四 ここのよと
んと落ちて かたるな女郎花 髪取り上げて 撫子の
草は野に咲く 仇花よ イヤ 折らばとく折れ 散
らぬ間に さんさの百合に ゆりかけて さつとゆり

の 若君さまは てかいた世の この千年も いきの
松原 やんはれいよへ それわかゑたもやよ エイ
〜 栄ゆるの外エイ〜 ね

四一 住吉詣二十一替り

ヤンレ 君が代の久しかるべき 例しとて 植置き給
ふ 住吉の松吹く風に 夢覚めて 思ひ立つこそ 神
の告げ エイヤヨエイヤ コノ道しばの道の者として
茶屋すだれ 流れをたてし俤や イヤハ 陰こそうつ
れ 川水に 垢離掻潜め 住吉の 浜路をひろふ千鳥
足 イヤハ 連れにひかれて いつとなく あげのた
まがき みしめ縄 エイヤヨ エイヤ コノ千早振る
あまの岩戸に おのづから ありし神代の かつら
草 イヤハ 色こそ春の空なれど 夏草茂る 最中な
る 秋のお花は 袖のふゆ イヤハ 雪かと拂う四方
の躰 是は何さま せんきやうに 入るや あやじや

かけ 小姫百合 とけてそひねの とこなつよ イヤ
ハ

四二 七つ替り

ヤンレ 忍ぶれど 色には出でし 我が恋は ものや
思ふと おもひし君が エイヤヨ エイヤ コノ深山
隠れの鶯の まだ里馴れぬ こはねにて 尋ねられた
よ 胸はとき〜 しや〜は うれしへ 折柄よし
やいつ迄か いわで月日を過ぎぬかと さしていかゞ
忍ばんと 思ひ染めにしころよりも 今日が日迄の
あらましを 語りもあへず お手をとる ヤレ 手を
とりな ヤレ 手をとるな 余所の袂も 知りもせで
其の時君のお詞に コノ 我は浮草 ヨホ、ヤヨ
ホイ〜ホ、 さそさまは 水が誘ふ 水をば待つ計
りじや サ、サンカラガハ 濡れかけた しゆんで
きたそうな しゆんできたそなが よい〜 恋は

くなきつても しゆんできたそな 与兵衛殿 よい
くさつさよい 此の誠に さあい思ひさ 比翼連理
の中となる アリヤ、踊りは アリヤくハツハ
よい エイく ぶりだすかいなに 悪魔をはらひ
打ち込む手には 寿福を抱き 千秋楽は 民を撫でつ
さすつのふ品ものよ ヨイくく エイ さて 万
歳楽には 命を延べつ延ばしつ エイ さて相生の松
の風 さつくの声が 転寝の枕に ひゞき 目が覚
めて 思へば 是は長夢じや 夢に

四三 椿つくし

さても面白の 心のどけき はるべかな いざ立ち寄
りて 花園の 春木の色数へつ、花のよそおい 八
重ひとへ 千巻万巻の物語り 人の心も さかりなり
一枝折りて いえつとに エイヤヨく 此のしつ
心なく 眺めけり げに 名の多きその中に 先づ朝

言ふて 猛き心も 弱々と れんげほうにや えんが
くの心も すみにさころもの 古今不双の なりふり
はげにおとなしき大江山 ほのかに見ゆる みやき
のの 身はしろたへに咲き乱れ 千歳をのぶる しゆ
んしやくの 心も四方に開くなる 君々たれば 臣も
又 豊かに住める 御代とかや ヤラく

四四 酒音頭(酒くとき)

先づ奈良酒のへ 奈良酒ならば 酔いたさを、一盃
な 奈良酒ならば エイくナ さらば名酒を 四季
になぞらへ 咄してみましよう 春はまつさく梅の酒
とや 三千年に 一度は花咲き 実もうなる 西王母
か桃酒は じゆうらくが じゆうの 風吹けば 花ふ
りとも名付けたり 夏は涼しき かうの池とや 清水
え川に 出水泡盛 秋はさやけき 月と争ふ白酒 じ
ゆうくんごみ酒 はかたの なんげんくげ有田蒲で

霧が はつしもの 雲井にまがふ みづひきは かわ
りほりかや あすか川 さゝ波までも こちして
錦と見ゆる もり山の 君の心も ひろしまや みち
のへすぎて 夕霧に 咲く桐壺の しなやかに すき
にふりて 白露の はづゑにのぼる きんきやくは
ほのじとわかり うかくと イヤ いまの情けを
いつわすりやう さまの面影 忘れはせまい 幾千代
かけて 変わらじかの石山に イヤ かきおきし 昔
を今に みやまきの やゑけんしにや 名を上げし
ゑどの風を 待つ風に 哀れ床しき ことのねや 高
ねにつもる 富士の雪 その夏雪は ちんの、すか
たをさそなそめくと おざさらなる なりふりは
エイヤヨく 此のいまの白ての朝日山 千里を越
へて 静かにも見へしは 花の白菊を 撫でて思ひを
須磨の浦 いかかねつとふ あかしかた 一の谷に
て 熊谷も かの敦盛の ほれくと おもはゆげな
る お姿や イヤ 見てからくくく ほんのじと

はないは さてのほんくく 煉酒は 何と煉るや
らは、とろり とろりんく とんとろりと ねる
程に ありやくアアこのくくハツハ 酔たさ
コノ 酔たさの かけ声菊の酒にも 咄しがござる
よの 唐土の事かとよ 周のぼく王の御時 子童と言
いにし其の人 寵愛の余りに 枕をこへし科により
鉄けい山に流され 菊のそのふに イヨ 住み給ふ
法華経の 普聞梵の 二の句を授かり 菊の裏葉に
書き付け給ふ 雨露のかゝる音は ハランラ、ハラ
ンラく したたんく そのおいした、りが 給は
りて コノ不老不死となりての 命ながへの 菊の酒
とや 我が朝に渡り 加賀の国の名物 来て見はら
おばへきてみわらをば 酔たさを、一盃な 一盃なら
ば 着をもふぞ 三笠くと二、三度呼べど 三笠出
もせで ちんたのわせた ちんた何にしように そつ
ちでのめ しゆんとさせ 三笠やめ しゆんとしたこ
そ 三笠はよけれ 余りちんたの した、るや しゆ

んとさせ三笠 さてもく ホイヤく ヤア なに

をしようとは そりや気俣よな どうしたる酒な イ

ヤハ 人にさすなら 金剛く きゆらこんきゆう

こん下に置け 酔うたやつき そつちで せこれ

くく 押へた コノ おさんがじゆうなら 亭

主が内なる 肴はなんじや 山鳥々々 山鳥ならば

そこらでしめろ まかしておける コノ まかせがし

よなら 冬の季は 又霰霰に あらき酒をば ひひ

の酒に温め酒に 焼酎すぎたら いたみとならん酒

桑酒くわえて味淋酎 忍冬酒の交わりは葡萄酒に究ま

ると 下戸も上戸も 勢揃へてどういやく どつと

一度に保命酒 四季をあさりを 祝い治めて 爰で樽

の口を きりくしやんと ねじあげ 新酒は内にか

イヤ 留守じやは そつちでせ 此の新酒てしたを

なやした ヤア 舌をなやさばサ われふるまた酒

の へわれふる酒の酔たさを、一盃な 御代も濁

らぬ清酒や 御代もにござぬ すみざげや 花のお江

戸の名酒かな

四五 祝言

鶴と亀とが 舞い遊ぶ 鶴と亀とが 舞い遊ぶ

声まゝぬ御代ぞ 目出度けれ

」